



Title	プライベートプレス運動におけるエラニープレス
Author(s)	今井, 美樹
Citation	デザイン理論. 2024, 83, p. 98-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93433
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

プライヴェートプレス運動におけるエラニープレス

今井 美樹 大阪工業大学

はじめに

ロンドンで開設されたエラニープレス（1894-1914）は、フランス人のリュシアン・ピサロ（1863-1944）とその妻エスターが主宰した私家版印刷工房である。リュシアンはフランス印象主義の画家カミーユ・ピサロの息子であり、画家・版画家として既にフランスで活動していたが、1890年に渡英して工房を準備・設立し、出版された全32編の刊本の多くは小型で挿絵やオーナメントがほどこされた文学であった。

商業を目的としない出版物は、18世紀後半より貴族や中産階級の個人的活動として存在していたが、ウィリアム・モリスがケルムスコットプレスを設立し、活字デザイン（タイポグラフィ）、版組み（タイプフェイス）、これらの紙面に対するレイアウト等の書籍の在り方を説いたことによって、ブックデザインのモダニズムを誘発するプライヴェートプレス運動となった。エラニープレスもこの運動の一環として認識されている。

設立の経緯

工房設立にあたってはチャールズ・リケッツの存在が大きい。イギリスの人気挿絵家で後にヴェイルプレス（1896-1904）を設立することになるリケッツは、リュシアンの活動を支援し、版画集『リュシアン・ピサロによる12枚の木版画集』（1891）を発行したほか、自身が刊行していた雑誌「ダイアル」にも木版画を掲載するなどした。

これ以前、リュシアンは1883年にも1年間の渡英経験があり、ウォルター・クレイン、ケイト・

グリーナウェイ、ランドルフ・コルデコットらの挿絵を用いた多色木版の児童書に感銘を受けている。帰国後、フランスの木版画復興の中心人物であった版画家オーギュスト・ルペールに師事し、多色刷り版画の工房での仕事も得た。この頃のリュシアンの作風は、ポール・シニャックとジョルジュ・スーラらの光学理論に基づく点描技法に影響を受けており、1886年に印象派展とアンデパンダン展に点描による作品を出品している。またベルギーの20人会や、デュラン＝リュエル画廊の「画家＝版画家」展においては、木版画で評価を得た。

こうしたフランス版画業界での活動の傍ら、挿絵本の制作にも取り組んだが、いずれも実現には至らなかった。画家・版画家としての業績がありながら、彼の作風はフランス出版界のマーケットには合わなかったのである。このような経緯で、1890年に挿絵入り書籍の出版が盛んなイギリスへ再び渡った。

刊本の特徴

最初の刊本『魚の女王』（1895）で、リュシアンが挿絵および紙面オーナメントのデザインと彫刻を初めて全て一人で手がけた。テキストは彼の自筆が写真製版された。多色刷りの挿絵が特徴で、挿絵を囲むオーナメントは金粉刷りである。多くの工房が黒インクの単色刷り、または赤をアクセント的に使用する2色刷りであるのに対して、3色以上の多色印刷はエラニープレスの最大の特徴となった。挿絵の柔らかな色調や素朴な情景に児

童絵本の趣がある。2冊目『ルツ記とエステル記』(1896)、3冊目『伝説的な道德劇』(1897)は、モノクロの挿絵のみであるものの、最初の3作品の作風は、1冊目に新印象主義の理論に沿った多色木版の表現、2冊目に日本の浮世絵がノルマンディー風に翻案された骨太な人物描写と平明な空間表現、3冊目にはラファエル前派の影響が指摘されている。また『眠れる森の美女と赤ずきん』(1899)の、見開きページの挿絵には、17世紀イタリアのキアロスクーロ技法を取り入れ、中世の彩色写本や祭壇画を意識した表現との指摘もある。

印刷用紙は4種類の紙が使用された。インクは黄・赤・青の限られた色を用い、その発色に満足がいかなければ油彩絵具を調合することもあった。

製本に関しては、2冊目以降から植物パターンを用いた紙の装丁が適用された。これと同様の装丁デザインが、リケッツのヴェイルプレスでも同じ時期から採用されており、デザイン活動において相互の影響が見て取れる。

書体に関しては、長らくリケッツのデザインしたヴェイルタイプを使用していた。工房設立から8年経って、ヴェイルタイプをベースにしたブルックタイプを開発した。

エラニープレスの印刷冊数は、21年間で計32点、紙刷本だけで総冊数5,980部が印刷された。書籍の内訳は、フランス語の文学・詩歌が17点、イギリス語の文学・詩歌・随想が8点、その他は旧約聖書、エラニープレス書誌、演説記録がそれぞれ1点である。

フランス語による刊本も多いことから母国での評判も良く、『魚の女王』は画商サミュエル・ビングが主催した書物の展覧会(1896)に展示された。フランスでの評価は、後年の活動において顕著となった。

活動の功績

エラニープレスの功績は、ブックデザインにおけるフランスとイギリスの架け橋となったことで

あろう。

フランスの美術評論家ロジェ・マルクスの口利きにより百人愛書家協会から制作依頼と支度金を得たネルヴァルの幻想小説『暁の女王と精霊の物語』(1909)は、挿絵に加えてオーナメントや紙面構成の複雑さが際立つデザインであり、同じくマルクスの仲介により実現した中国詩集『「玉書」選詩集』(1911)は、東洋の書籍を意識した世界観を表現している。現代書籍協会のために制作された『楓の犁』(1912)は、農村の暮らしをテーマにした版画集で、リュシアンを原点としてのフランスの農村風景と、印象主義の表現に立ち返った作品となった。

フランスでは画商が企画した書籍や画集に、画家や版画家たちが挿絵やデザインを行うことが流行となり、これに加えて、愛書家による豪華本・稀覯本の製本技術ルリユールが盛んであった。フランスでは版画家として認められていたリュシアンだったが、その作品を挿絵として採用してくれる出版社を探していた頃、父カミーユや編集者からはチャールズ・キーンやジャン・ペローといった都会的で洒落な挿絵を手本とするよう示唆されたが、都会で繁榮する印刷文化にリュシアンの作風は牧歌的で素朴すぎる傾向があった。その彼がイギリスでの活動を経て、母国で書籍制作の依頼を得ることができたのは、個々の挿絵に対する評価ではなく、丁寧で美しい作りの総合的なブックデザインが認められた故であり、書籍を構成するデザイン要素の中に、魅力的な多色刷りの挿絵も含まれていた、と解釈する方が納得できる。

エラニープレスは、印象主義版画を基盤として確立された挿絵が特徴的な出版を行い、素朴で平和的な主題と、素材と装丁のプロセスに丁寧な書籍作りが愛書家を魅了し、慎ましながらもイギリスとフランスの両文化の橋渡しをした意味において、プライヴェートプレス運動の主要な要件を備えた活動であった。